

特集

## あがらの道づくり

— 聖地「熊野」を支える人をつないで —

「熊野古道大辺路刈り開き隊」ができるまで

雑賀 桂

## 1 取材対象から活動対象へ 「熊野」を通じてできることを考えた

和歌山県の南、太平洋に突きだした紀伊半島南部の「熊野」と呼ばれる地に住み、地元新聞社で働いた10年、そしてフリーフォトライターとなった今も、私は自然信仰の聖地として知られる「熊野」に受け継がれる、自然と人が密につながりあう暮らしをライフワークに取材している。

その現場が向き合う課題や問題が自分の琴線にふれ、「無関係ではいられない、私もできることをみんなとやりたい」と思った時、私は取材する立場から現場に一步踏み込み、ともに活動する一員になってきた。

職業柄、活動を分かりやすく紹介したり理解を広げる広報役をすることが多い。また、熊野各地でいろんな団体や人に接してきたことで、同じ熊野にあって同じような活動をしている人がいたり、活動方法や内容が違うが目指すものや価値観が似た団体があれば、それぞれの人同士を紹介し、つなごうとしてきた。それぞれ一人でがんばり続けるより、理解し協力し合える仲間が増えることでやりがいも楽しさも共有して倍増する。活動の裾野が確実に広がると感じたからだ。

活動分野は自然環境、信仰、民俗文化などさまざま。しかし、異なるように見えるが、すべてこの地の生活につながってきたものである。

この地には、急速に変化する時代の中で社会の価値観や生活様式が刻々と変化しても、この地を離れず変わらず、この地の宝や暮らしの知恵をほそほそと受け継いできた人々がいる。彼らはさらに、一度廃れたものを取り戻そうと活動をしている。

2004年、霊場と信仰の道が世界遺産になった「熊野」という土壌を、いにしえから現代まで受け継いできたのは、この地に暮らしてきた人々である。取り組み方は異なっても、「このふるさとで、子孫がずっと暮らし続けていけるように」と、みんなが共通して思っている。熊野の現場、最前線で守ってきたのはそんな土地の人々だと思う。

私は道普請団体メンバーなのに草刈り鎌もろくに使えず、森づくりの団体メンバーなのに何度見ても木の名前をなかなか覚えられない。それでも花の賑わいに、自分にできることを探して、「こうしてみたらどうだろう」と、思いついたことをしている。

なにより大切なのはメンバーと顔を合わせて一緒に汗を流し、語り、「あがら一緒に」この地の魅力を楽しむこと。それがとにかく楽しく嬉しいから、やめられないのだと思う。

## 2 日本の文化や信仰の源、本来の森を取り戻す 「熊野の森ネットワークいちいがしの会」

今から15年前、東京の出版社でアウトドア雑誌の編集部に勤めていた時、当時の編集長から勤め始めて真っ先に「『大自然』なんて言葉は恥ずかしいから使えな。日本にはもう大自然はないのだから」と言われて、ひどく驚いたことがあった。

東京に長く暮らした中で、故郷が「熊野」と呼ばれる自然信仰の聖地であることも知り、故郷を強く意識するようになった。

1998年、田辺に帰省してすぐ、地元新聞社の紀伊民報に入り、ジャパンエキスポ南紀熊野体験博の県広報誌や公式記録集を担当。博覧会は南紀熊野の文化、自然、暮らしの体験が売りで、「人と自然の共生」をうたっていた。

「熊野」が聖地といわれる所以、その現場、いにしえの物語ではなく、「今」をもっと知りたいと思っていた矢先、「熊野の本来の森、照葉樹林を蘇えらせよう」と声を上げて市民団体「熊野の森ネットワークいちいがしの会」が近く発足するというニュースを聞き、アンテナが震えた。初代会長は、田辺市在住の生物学者、後藤伸氏。かつてあった熊野の本来の森の姿と、その森がそれこそ「神の森」にふさわしい多様な生命を

抱く宝庫であるという話にすっかり魅了され、その森が、このわずか100年の間に熊野からほとんど消えたのだという現実には唖然とした。

熊野の山野の8割は拡大造林による人工林に覆われ、本来の照葉樹林のまとまった森は、海岸部や奥地のほんの一部にパッチワーク状に残る程度。信仰をもはぐくんだ熊野の本来の「神の森」は悲鳴をあげている状態だった。さらに長年の林業不振で手入れをする人もおらず、スギヒノキの針葉樹一色に覆われた山は、乾燥と土壌流出で近い将来、大災害につながる危険もはらんでいる。「故郷の土壌を壊してしまったまま、子孫に受け継いではいけない」と、後藤先生は危機的な状態を訴えていた。

「これは一地方の問題ではなく、日本全国で抱える問題だ」と感じ、以後、後藤先生が2003年に亡くなるまでの5年間、約50回の講演記録をとり、行動を共に運動推進に奔走した。

その晩年は林野行政の過渡期にもあたり、山野を経済林と考えてきた行政が、環境林と考えるように大きく方向転換した。それまで行政にたてつくブラックリスト者だったと笑っていた師も、次第にその活動が行政からも応援を得られるようになり、死ぬ間際、南方熊楠賞の特別賞を地元から初めてもらい、「時代が変わったんだ」と感慨深げに喜んでいた顔を思い出す。

いちいがしの会では、発足当時から会を育ててきた竹中清会長や田中正彦事務局らが後藤先生亡き後も意志をひきつぎ、だれもができる間伐法を広め、土地に本来あった樹種を植えるべく、ドングリから苗を育てて植樹したり、勉強会や観察会など地道な活動を続けている。会員は300人。自然環境に関心ある人や、子どもころの故郷の姿を取り戻したいと切望する幅広い年齢の人々が紀南一円や県外からも集い、「100年、300年先、子孫の代には見てもらえるだろうか」と、本来の聖地の森を夢見て森づくりに取り組んでいる。

### 3 山岳修験の道を発掘整備、修験者のサポートを続ける「新宮山彦ぐる一ふ」

後藤先生は、「日本人の信仰の原点は、人知を超えた自然への畏怖心。日本人は森の民。照葉樹林文化圏の東端の国だ。熊野だけでなくかつて

日本を覆っていた森は、流れ着いたあらゆる命を受け入れる懐の深さがあった。森は水や土壌、海をも豊かにする。そこに日本人のおおらかな信仰心がはぐくまれた」と語った。

自然信仰の祈りの現場に触れたくて、1999年、私は那智山青岸渡寺の高木亮英副住職が導師を勤める「熊野修験」に参加し、修験道の根本道場である大峯奥駈道を歩き始めた。熊野修験は、明治時代に廃仏毀釈で途絶えた修験道を20年前に復興させたもので、道中に点在する行場で森や岩に神仏を拝して祈りながらひたすら歩く。「自然の中で人間性を回復する行」と、高木導師は教えてくれる。

吉野と熊野の二大聖地を結ぶ奥駈道。1000～2000m級の山々が連なる大峯山脈を、那智山から吉野山の蔵王堂まで200km近い険しい道（山上ヶ岳は女人禁制のため別ルート）を年4回にわけて歩く。連日、1日8時間以上、雨風関係なく険しい道のを勤行しながら歩き通す。年々参加者が増え、全国から時に200人も参加者が歩く回もある。送迎やリタイア者の回収、お茶やお菓子のお接待まであって、サポートが充実しているからそれだけの人数が歩けるのである。

私は、初めて参加した年、道中の行仙宿小屋までたどり着いたものの膝を痛めてリタイアしてしまった。しかし、リタイアしたことで、当時、一行40人の食事や宿泊、弁当、道中の安全をボランティアでサポートをしてくれているのが「新宮山彦ぐるーぷ」のメンバーであることを知ったのだった。

山彦ぐるーぷは、昨年創立35周年。すっかり埋もれていた奥駈道の熊野側、南奥駈道45kmを「千日刈り峯行」と称して足かけ3年、315日かけて草を刈り道を開き、さらに何巡も作業を繰り返して復活させた。ほかにも道普請は悪路の補修、行者でも難所の鎖場の張り替えや木橋の付け替えなど、挙げればきりが無い。宿泊できる場所がなく切望されていたカ所に山小屋を2軒建設。非常用の飲用水を往復1時間かかる谷から担ぎ上げ、非常食料を補給し、熊野修験だけでなく、ほかの修験団や単独修行の行者のサポート、接待などを20年以上続けている。まさに陰の行者といえる奥駈道の立役者が彼らだった。2005年には、よき市民に与えられる「シチズン賞」を受賞した。

メンバーの重鎮、玉岡憲明代表と女房役の山上皓一郎さんはどちらも80才を超しており、メンバーのほとんどが還暦を超えている。毎週のように片道2時間以上かけて山の登り口にたどり着き、10キロを超す資材や接待用の食材などを背負って山をのぼる。さらに作業現場では、砂利や資材を運搬して、建設会社のような激しい肉体労働が待っている。

「行者の修行は本来、衆生を救うためのもの。その修行は、衆生が支えなければならない」と玉岡代表は淡々としていう。

私は奥駈修行の途中の行仙宿小屋で、幾まわりも若い私に「ご苦労やったね」と言ってあたたかい味噌汁を山上さんがよそつてもてなしてくれた時、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。山上さんの一行を迎えるために流した汗を思うとその一杯はとても重かった。「歩く人がいてこそ道は守られる」のだが、「歩かせてもらってる」ことに気付かねばならないと、痛切に思った。

山仕事はだれでもすぐにできるものではない。支える側の作業も体験しておかねばと、私は熊野修験で歩かせてもらう一方で、山彦ぐる一歩の先輩方に教えてもらい、山で食事を用意する「まかない修行」を4年前から少しずつだが始めた。水場のない小屋で40人分の味噌汁やご飯を用意することがどれほど大変か。水の使い方、暖をとる薪一本に配慮と知恵が必要で、やってみなければわからないことばかりだった。

私は、熊野修験で歩く時、初めて奥駈に参加した人や、奥駈に興味をもつ人たちに、この奥駈道を支える彼らの存在を話すことにしている。私のほかにも「支える側の立場を共有したい」と、東京からわざわざサポートのためにつけるメンバーもいる。そうした支える側の活動はなかなか知られにくいものだが、そこに彼らがいるから道がある。修験者も、支える人たちも、ともにこの道に不可欠な存在なのだから。

## 4 人をつないで道づくり

### ——「山彦」の経験も生かして「熊野古道刈り開き隊」発足

私が串本支局の記者だった2004年は、熊野古道が世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された年だった。世界で2つ目の道の遺産であり、日本でもっとも広域にわたる遺産。先にも触れた大峯奥駈道、熊野



【熊野の森ネットワーク いちいがしの会】  
熊野古道中辺路の近くで植樹作業。シカに苗を食べられるのでヘキサチューブを使用



【熊野の森ネットワーク いちいがしの会】 森の再生には、その土地に本来あった樹種を植える。熊野の照葉樹林は種類も多彩。常緑樹も落葉樹も適所に植えるよう、作業前のレクチャーは欠かせない



【熊野修験】 山中の行場で神仏に祈りを捧げる那智山青岸渡寺副住職の高木亮英導師と修験団



【熊野修験】 熊野から吉野へ。修験道の根本道場といわれる険しい山岳修行の道、大峯奥駈道をゆく



【新宮山彦ぐるーぶ】 鎖場もある険しい修行の道。木橋や鎖の付け替えなど老朽化に常日頃から点検の足を運んで作業している



【新宮山彦ぐるーぶ】 水道もない山小屋で、10年以上修験者やぐるーぶの作業で食事の世話を担ってきた「まかない」大ベテランの女性たち



【大辺路刈り開き隊】 大辺路沿いに設置された案内地図。イラストは発足メンバーでイラストマップ担当の生駒和歌子さん



【大辺路刈り開き隊】 串本町田子で。背丈を越すシダや草木に覆われた中、熊野古道を見つけ出して刈り開く

三山へつづく御幸道の中辺路、半島南部を海沿いに続く大辺路、伊勢路、高野山と熊野をつなぐ小辺路と、さまざまなルートが、その周辺の人々の暮らしと結びついた景観「文化的景観」の価値が認められて、遺産となった。

大辺路は田辺から本州南端の串本を経て、那智、新宮へと海沿いをゆく熊野古道最長のルートだが、調査が間に合わなかったという理由でわずか3坂しか遺産登録されなかった。

当時、大辺路といえば、ほとんどが国道42号線と紀勢線の敷設によって寸断されたり重なっていると思われていて、大辺路＝国道と紹介されたりもしていた。串本界隈では、世界遺産どころか熊野古道を知らない人が多かった。

しかし、串本で記者活動をする中で、遺産登録以前から埋もれていた大辺路を長年、単独で調べ続けているという人が道筋にいたことを知った。さらに、偶然、橋本市から毎週のように大辺路に通い、山中に残る本来の道を探索し続けている辻田友紀さん（初代、刈り開き隊隊長）に出会った。

「山中や海岸にはほんとうの大辺路が残っていて、作業をすれば歩ける。大辺路にはほかの古道で失われた自然の森が多く残り、海の展望と人々の暮らしの中をゆく潮風の道。道を開けば大辺路の宝が生きてくる」と、大辺路の壮大で多彩な魅力に共鳴した。

ちょうど大辺路のイラストマップを発刊する計画を、友人、わかやま絵本の会の生駒和歌子さんが進めており、「歩けるなら本当の大辺路の道を紹介しよう」と、作業した段階でマップに仕上げる段取りとなり、さらに調査中、偶然出会った地元の岩本立彦さん（現、作業隊長）が「地に埋もれた宝があるなら責任もって掘り起こそう」と仲間になり、作業団体「熊野古道大辺路刈り開き隊」は、当初4人で串本で発足した。

白浜から串本、古座の約70kmが隊の作業区間。それまで単独で大辺路調査を続けていた日置川やすさみ町の個人も巻き込み、まさに「人をつなげば道がつながる」と、作業とともにメンバーも増えた。さらには、「大辺路と伊勢路をむすんで紀伊半島の海岸部を道でつなげよう」という三重県の隊員もいる。今、メンバー40人。それこそ3歳児から83歳ま

での幅広い年令の仲間が、この5年間で一本の道につないできた。

いくつもの町に渡る広域団体であり、メンバーそれぞれ海の人、山の人、町の人、Iターンの人、性質も違えば参加する目的も考え方もちがう。もともと大辺路をひとりで開き続けてきたような一匹狼の面々も多く、「みんなちがってみんないい」の精神でなければまとまらない。だから、当初はあえて代表おかず、各地区の担当者をリーダーとした。

作業するエリアが片寄ってもいけない。自分の住むエリアの作業をみんなでしたら、他の町の作業もみんなでしょうという気持ちを大切にしてきた。当初は親睦を深めるために、総会も年に2、3回開いた。現、事務局長の仲江孝丸さんは、四季彩に富む大辺路らしいホームページや、隊のテーマソングを作ってくれて、今も開会前にはみんなでそれを歌うのが恒例だ。

道を開くということは、守り続けることが前提となる。橋をかけたり階段を作ったり、温暖多雨地帯だけに、毎年シダなどの草刈りをしなければあつという間に覆われてしまう。先駆者である新宮山彦ぐる一歩の、奥駈道を復興し守り続ける活動姿勢が大辺路に重なった。作業隊長の岩本さんは「ほんとうに大辺路を再生させるつもりなら、彼らの姿勢を見習ってやる腹づもりが必要だ」と隊員の士気を高め、自分がまず実行することでみなを引っ張っている。

作業を経て80年ぶりに開かれた石畳道や大辺路独特の海の展望の道を歩いた人々から「感動した。また歩きに来るからね」と、喜ぶ顔を見、感想を聞くと、当初は、熊野古道そのものにも興味がなく、作業がただ楽しくて参加していた隊員も、住んでいる足元の魅力に気付きはじめた。

5年経った今では、ほかの熊野古道の中辺路や伊勢路なども歩いてみたり、自分で開いた道の語り部をするようにもなった。

「自然保護なんて言っていたら道開き作業なんてできない」と言っていた隊員も、道ぞいの自然環境に興味を広げて話し合える空気も生まれている。昨年、朝日放送の環境特番が組まれた際、「道を開く」という人為的な活動と自然環境保全とのバランスを考える題材に取り上げられた。刈り開き隊の活動の中に、人と自然との関わり方における大切な意識が数多くあるとして、私たちの活動における現場の繊細なやりとりや

メンバーの思いが取材されて放映されたのを見て、私たち自身が驚いた。

実際、大辺路を歩けば、周辺には海、川、森がつながり、いろんな生命が行き交う混沌とした自然と風土の魅力、自然と深くかかわりながら暮らしてきた人々の奥深い知恵が、今も生きていることに触れられる。点在する自然信仰の姿もある。世界遺産にふさわしい「文化的景観」が残された道だと思う。でも、世界遺産ではない。将来、開発などで壊される可能性もある。

県や道沿いの町の協力も得て、大辺路の他団体とも連携した「大辺路再生実行委員会」も発足し、一昨年、本来の大辺路が明らかとなりつながったことから、『熊野古道大辺路調査報告書』も訂正されて再版された。

## 5 この道沿いに暮らし続けられなければ、 世界遺産は受け継げない

### —どの活動も「熊野らしさ」には欠かせない

普通なら国道を車で通りすぎるところを、熊野古道を歩けば、昨今、限界集落といわれるような小さな小さな集落に出会う。そこにはまだ自然と人が密接に関わって暮らしてきた文化が脈々と息づいていて、訪れる人たちを感動させてくれる。一方、多くの捨てられた集落も点在する。かつては立派だった棚田、石積みの水路、田んぼだったところに、植林して出て行った。どれだけ「子孫のために」と苦勞してつくられた田畑や集落だったのだろう。住む人がいなくなると道は廃れる。人の営みである文化も消える。

熊野古道は、視点をかえれば、近代の急速な価値観や経済形体の変貌の中で、失ってしまった痕跡をみる「負の遺産」でもある。一度失われた村の営み、途絶えた文化は、床が抜けた田んぼと同じく、取り返しが見つからない。

串本支局員時代、古座川エリアも担当した。古座川流域にわけ入れば、そこはまさに本来の熊野らしさの残る秘境。過疎高齢化の深刻度は県内でもトップクラスだが、かつて日本人がいかに豊かで繊細な感性や動物的なすぐれた感覚をもっていたかに、驚かされる。

「里山道場」の主、室実信さんに出会ってますます古座川ファンにな

った。当時はまだ室さんは町職員だったが、60歳からの人生のために早めに準備が必要だと定年4年残して退職し、子ども時代を謳歌したかつては豊かな里山だった集落の山と川の環境を取り戻そうと、道場を立ち上げはじめた。30年前に消えた室さんの里山。いかに祖先が大事に育ててきたものであったかを熱く語るのを、私もいちいがしの会の活動をだぶらせながら、思い同じくして熱くなった。たとえ自分たちがそれを見ることができなくても、育てていこうと熱くなる人に、私も熱くなった。

自然観察会の補助案内人や、「古座川ファン」を自称して企画応援を手伝う。いちいがしの会や刈り開き隊などのメンバーを交流させたり、一緒に自然環境を語り合い、ツアープランを考えたり。私は町外在住のよそ者だが、とにかくこの町に関わっていたいのだ。

大辺路の活動は、発足から6年。例年、県のバックアップもいただいて、今年に入り、なんと世界遺産への追加登録の可能性が浮上し、手探りだった目標が手の届きそうな距離まで現実味をおびてきた。また、古座川は、その自然の魅力が再評価されて県立自然公園地区に認定されるなど、その価値がより明確に認められ始めた。

大辺路を舞台に人が道を、道が人をつなげもするし、さらに森の活動も修験の道も、里山再生活動も、すべての活動はバラバラのようで、みんな「熊野」の底上げにつながっている。「熊野」を語るにどれも私にとっては欠かすことができない。

後藤先生がよくいっていた。「専門バカになるな。昆虫だけ、植物だけ、鳥だけくわしいなんて学者やない。虫を知りたければ植物も土壌のことも、とりまく環境を丸ごと知ろうとしなければ、生きものたちの声は聞こえない」と。

熊楠の立体曼荼羅のように、表に見える活動も見えない活動もつながり支え合っている。だから一緒にできることは、みんなですてゆきたい。

互いの団体をかけもちしているのは私だけではない。刈り開き隊の現隊長・上野一夫さんは私と同じく那智山の熊野修験メンバーでもあるし、古座川街道やどやの会代表・神保圭志さんは、刈り開き隊といちいがしの会のメンバーでもある。人口が少ない地域だから、一人何役もこなさねばならないほど、人手が足りない現状がある。それも楽しくない

と続けられない。熊野のため、それこそ「あがら一緒に」やるしかないのだ。

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の本当の宝もの。それは、この聖地「熊野」たるものの土壌を、身体をはって受け継ごうとしている「人」なのだと、私は思っている。

雑賀桂 (さいかかつら)

和歌山市在住。フォトライター。元、地元新聞社「紀伊民報」記者、編集者。熊野の自然と人々の暮らし、信仰をテーマに取材。県世界遺産マスター、熊野セラピスト。県立自然博物館評議員。熊野古道大辺路刈り開き隊、熊野の森ネットワークいちいがしの会、新宮山彦ぐるーぷ、古座川街道やどやの会ほか。